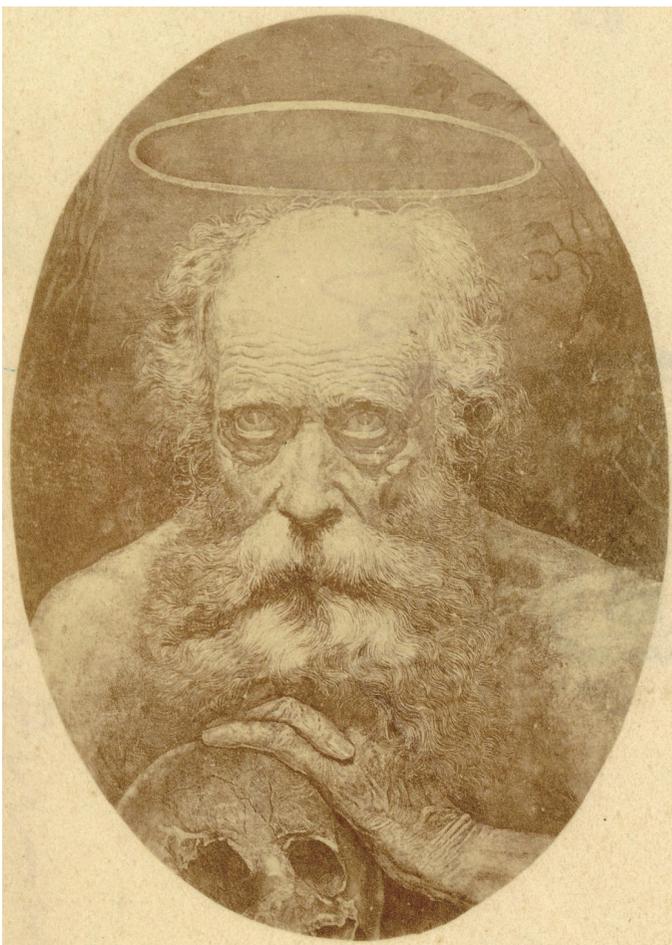


医聖ヒポクラテス



*小田家文書（山口市吉敷） 194 「ヒポクラテス写真」。当家文書には「解体新書」や、緒方洪庵が訳出したフォーフェラントの「扶氏経験遺訓」など西洋医学の書物が数多く残されています。

解説

古代ギリシャでは、紀元前5世紀頃から市民による直接民主政の下で、演劇・建築・哲学・数学・医学などが発達しました。

「ヒポクラテスの誓い」（医者倫理・任務などについての、ギリシャ神への宣誓文）で知られるヒポクラテスは紀元前4世紀頃の古代ギリシャの医者です。医学を原始的な迷信や呪術から切り離し、臨床と観察を重んじる経験科学へと発展させたとされ、後の西洋医学に大きな影響を与えたことから、「医学の父」「医聖」「疫学の祖」などと呼ばれて象徴的な存在となりました。

日本でも、江戸時代の蘭方医たちの努力によって西洋医学が導入されると、ヒポクラテスは理想的医師像として広く知られるようになりました。その普及に一役かったのが写真のような肖像画であり、東洋医学（漢方医学）における「神農」の図と同様に、西洋医学の象徴として飾られることもあったようです。

写真は、江戸時代に萩藩一門の吉敷毛利家の医者を務め、明治以後も代々医者であった小田家に伝来したヒポクラテスの肖像写真です。